

中国のほんの話(52)

堀田善衛 『上海日記』・『齒車』

蔭山 達弥

堀田善衛は、終戦前後いっしょに上海にいた友人武田泰淳との対話の中で、中国との出会いについてこう述べている。

「上海に仕事があるという話で、ぼくは上海へ行ったんだけど、これは完全に偶然なんです。完全な偶然であって、中国へ行ってみようということは考えていましたけれども、ぼくがじっさいに行ったのは、つまり1945年の3月ですから、もうそりゃ、敗戦まぎわといっているところなんです。」(『対話 私は今も中国を語らない』朝日新聞社1973)

堀田善衛は1945年3月末から、1年9ヶ月にわたって上海に滞在し、日本の敗戦を上海で迎えた。彼は中国国民政府の中共宣伝部対日文化工作委員会に留用され、その後1年ほどを上海で過ごした。

「1945年3月24日から、1946年12月28日まで、1年9ヶ月ほどの上海での生活は、私の、特に戦後の生き方そのものに決定的なものをもたらしてしまいました。もとより文学の仕事を一生涯の仕事に、とはそれ以前から思い定めていた。けれどもそこへ、中国と日本という、まったく思いもかけないものが入ってきた。私は、戸惑った。いまだに戸惑いから脱しきれたとは言えない。」(堀田善衛『上海にて』はじめに)

堀田が初めて踏んだ異郷の地・上海は亡命ロシア人やユダヤ人、インドや東南アジア、南米からの流入者、さらに南京・重慶・延安のそれぞれ異なる中国の政治権力が放った地下工作員や特務機関、テロリスト、そしてかれらと判別つきがたい膨大な市民、企業人、労働者、人夫、やくざなどが混在していた。…しかも、国際文化振興会の上海資料室に籍をおいたものの、堀田の仕事はなかった。海軍の関係を頼って弘報部に入入りして食事にありつき、文化工作の名目で講演活動を行いながら、中国人学生や知識人と交流するのがやっとだった。(紅野謙介『堀田善衛上海日記』解題)

2007年夏、故堀田善衛宅で、遺族により二冊の自筆ノートが発見された。堀田善衛の原稿、資料、蔵書のはほとんどが堀田が1998年に亡くなった後、神奈川近代文学館に寄贈された。2008年秋開催の堀田善衛展が企画され、その準備のさなか、文学館職員によって、さらにもう一冊ノー



トが発見された。この3冊のノートは、紅野謙介(こうの・けんすけ)氏によって『堀田善衛上海日記 滬上天下—一九四五』というタイトルで同年11月集英社より刊行された。

堀田善衛が1951年5月、『文学51』創刊号に発表した小説『齒車』は、『祖国喪失』、『歴史』、『時間』などと共にこの日記を材料にしたものと思われる。『齒車』の主人公・伊能という男は終戦のあくる年、上海で中国のある機関に徴用される。作者堀田自身がモデルのようである。主任委員の青白い、やせた男・何大金、いつも何につきそう張愛玲という女性、伊能の上司の陳秋瑾という女性など、機関に出入りする人々が登場し、物語は幕を開ける。登場人物の張愛玲、陳秋瑾という名前を見て、中国近代史や中国現代文学に詳しい方なら「おや」と思われるに違いない。張愛玲は、当時日本占領下の上海文壇に彗星のごとく登場した女性作家の名、秋瑾は「秋風秋雨人を愁殺す」という台詞で有名な、処刑された女性テロリストの名である。

ある夜、伊能は上海の港の大倉庫群のあいだにある「血の雨横丁」と呼ばれた一角にある酒屋で陳秋瑾とばったり出会う。それから秋瑾は伊能が間借した家を度々訪れる。ある時秋瑾は伊能に「まったくこの政治というもの、頭も尻尾もなく、敵味方だといってみたところで、結局は敵味方が相対的に齒車のようにがちり食いあつたうえで、政治にとってただ一つ絶対に必要なもの、血と肉をもった人間をがりがり食って生きているのですから、どこをどうといって切りようもありませんが」と身の上話を語る。『齒車』は、戦後の上海で不安と恐怖に覆われた一年半を過ごした作者の体験に基づく作品といえよう。

かげやま たつや(教授・中国文学)